



筆道権古

年間

全四冊 入木道一秘密

傳卷名題ハシ格法七九

ツメ筆道訓一傳授正駢八景詩哥極則四駢千字文國字引能書手習法
各言等ヲ集メ載入此書ヲ見テ手跡ヲ替古スレハ上達スルノ神ノ如シ
其外詩歌ノ仕様石仰影様亦トデ初掌ノ便リ成ルヲ記ス

人家

万寶

大益

重法

初メ二冊ハ人ニ万
宝ノ第一長生富貴

錦

智惠ヲ以テ重キノ軽ク出来ナラヌノ
心易ク調ク奇妙ノ秘傳祕密ヲ書アラハス書

ナリ其集ムル所同ノ有無ノ如ノ晴雨日取
ノ持様ニテ父子兄弟内安樂暮サン

身ノ行ヒカソノ外徳

益アルサ三ヶ条ヲ解キ示ジ次ニ下モニ

此書トコトニ人家書

ノ万宝ヲ生スルノ書ナリ

囊

吉函舟ニノル法水煉ノ法地震雷崩方ニ知リ
元山ニ木ヲ生シ井戸ヲ清水トナシ占ノ妙術

妙茱打撲金瘡治方男女ヲ養人ニスル救ノ法

衣服器物付サシハ妙術魚鳥ヲ貯ニ料理妙法

虫歟モノサレタルヲ治シ或ハ蚊虱ノ類スベ

テ虫ヲ除キ艸木ノ苍ヲ自由ニ咲セ東方多

ナラセ或ハ久シク貯ニ様ソノ外此書ヲ用イテ

先ニ行ナラ処ノ博物峯ヨリモ此書ニ集ル所

七冊猶亦勝レル「倍々ナリ」

全

智術

妙茱打撲金瘡治方男女ヲ養人ニスル救ノ法

衣服器物付サシハ妙術魚鳥ヲ貯ニ料理妙法

虫歟モノサレタルヲ治シ或ハ蚊虱ノ類スベ

テ虫ヲ除キ艸木ノ苍ヲ自由ニ咲セ東方多

ナラセ或ハ久シク貯ニ様ソノ外此書ヲ用イテ

先ニ行ナラ処ノ博物峯ヨリモ此書ニ集ル所

七冊猶亦勝レル「倍々ナリ」

之書

全部

九冊

此書トコトニ人家書

ノ万宝ヲ生スルノ書ナリ

書

事ヲ為サバ德益廣大方宝ヲ得ルノ書ニシテ

ナラセ或ハ久シク貯ニ様ソノ外此書ヲ用イテ

先ニ行ナラ処ノ博物峯ヨリモ此書ニ集ル所

七冊猶亦勝レル「倍々ナリ」

四聲字林集韻大全

全二冊 字ノ誤リヲ訂レ大ニ改正精撰仕合

オクニ正俗字例兩韻并義其外詩作

使用ノノ等此度アラタニ增補イタレソロ
袋紙藍指ニテ下モノ如ク記レ出シソロ本

浪華書舗吉文字屋

定榮堂精造詞本

日本宋時記卷之五

秋

涅書律曆志よどく秋を極めり地盤欽もとれく成實
すとヘアラタニ閏年又株と御御と云。又經よ和とあくと御セ
レハあくとク多うとどうとナリ及ハ陽氣もんじて萬葉ノハ
氣もくよもう底氣也とれく株も陽もまでりて天色渋る

おりそんや一その船月れ

龙あくとクナリ月多くと

春回よとく秋ニ月これと春草とよ天氣也くをよ

始草也く明き早く刈もとめよと起立草 離と

但せよ志孤して安寧にて秋利トニ候

氣と收斂セテ先休まくとく至りて喜むと

秋よとくすく一め肺氣とよく清くし

し秋氣代無すり而て喜むとくこれみ



達人曰の腰氣とやゆりを食油となし
寒氣を除よどくまゝあ秋の初摺りとひるを以て
云財衣とぬき裸にして涼と貪りよりすり立
脱の胎完ら背に余り人をして扇毛のそ
風と取又衣多是と薦せハ風背より入中風の
ほくちあがめこれと浦、一欠りし瘡むるを
坐てハ喘息實毛と服之へることと之薑藥とよ
月令慶義よどく株ニ月收斂して毒揚絶體乎
多事有り

根生稀よどく秋氣を燐あり宜く胡麻と食

て了れ煙と側と

舌生瘻にまく茎と葉と事甚くやまとひの因
疾或瘻瘍と至まつ較敷和と熟一一向付薑
これとくへ宿疾と齧す事多すよ新采たよ燒
食ハ圓茎と齧らずとく又早霜の本敷せ
せきうてやくまことに都美なりあられく宿疾と
齧て瘻瘍と切て能脾胃とやゆり新敷十二三
日くとてれもあら

月令慶義よどく秋もまく老人病足の爲め
事と定くハ微少と用多是をあゆり一太不

病くよ害き

弊セリ。むろもがうれねうもはのやまひとがん
小児からやく火よ血くす

搾多滿よひとく株ハ弓矢と水とのをあめりたる
衣服と医事」と云

金賣要裏よひとく秋九十日斂^{カサガル}の腰と養へて
ま東屋^{カマクラ}つとく古人の云秋薑と食ふがうれんどて
高氣と櫻セリ。び脇^{カミハラ}居^{カマクラ}縫縫みを又林薑^{カシカ}人の
天年と人年とツの強弱^{カタチ}強す邀^{アフ}くともくハ九月
かやく薑と食ふと善よつて眼と歯^{カミ}と喉^{カミ}
筋^{カニ}と減す

六日沐浴

七月七日^{立秋ハ七月の始を立^ハ夏^ハ秋^ハの月の中}○七月の裏^{カマクラ}七日

寒風^{カクフウ}律^{リョウ}と庚^キ財^{カイ}と云^ハ。○七月八日名^{ナミ}と庚^キ財^{カイ}と云^ハ七日
身^{カラ}もよ里^{カミ}とてあこ^ハとぞ
身^{カラ}もよ里^{カミ}とてあこ^ハとぞ

七日七夕^{セトセキ}と云又墨夕^{モクセキ}とをつまう。難^{ハシ}茎^{ハシ}蟲^{ムカシ}叶^{ハシ}よひとく

七月七日織女^{セキヌ}牛^{ウシ}織女^{セキヌ}牛^{ウシ}織女^{セキヌ}牛^{ウシ}

五^カ雞^{カニ}牛^{ウシ}元^{カニ}雞^{カニ}牛^{ウシ}牛^{ウシ}の事^{ハシ}後^{ハシ}微^{ハシ}化^{ハシ}よ嫁^{ハシ}季^{ハシ}
ク語^{ハシ}とわ^{ハシ}物^{ハシ}あ^{ハシ}ハ^{ハシ}無^{ハシ}援^{ハシ}ハ^{ハシ}浪^{ハシ}行^{ハシ}と記^{ハシ}セ^{ハシ}り^{ハシ}給^{ハシ}
きく婦^{カミ}人^{カミ}の嫁^{ハシ}く口^{ハシ}實^{ハシ}と^{ハシ}ふ^{ハシ}可^{ハシ}人^{カミ}人^{カミ}
軍^{カニ}士^{カニ}物^{カニ}都^{カニ}破^{カニ}う^{ハシ}天^{カニ}上^{カニ}列^{カニ}宿^{カニ}と^{ハシ}て汚^{カニ}蠅^{カニ}と^{ハシ}
被^{カニ}せり^{カニ}赤^{カニ}り^{カニ}や^{ハシ}じ^{ハシ}ま^{ハシ}の基^{ハシ}一^{ハシ}頭^{カニ}方^{カニ}り^{ハシ}と^{ハシ}

せり。御室は確執とちう爲め、此事よりゆきとち
よ久くもあとあかり多く御方へんを想ておるやう
ありやまと、金印作等の料^カ、一袋^カ、びよび^カ
りとせり。されど、手札^カ、ひきれ甚^カ、さく^カ、
は事^カ、とえどもたゞ御書^カ、とくに實^カ
つて、大とゆきれざるか、新株^カ、代^カ、主^カ、國^カ、
そぞ多^カ、ノ、貴^カ、人^カ、料^カ、と、價^カ、何^カ、人^カ、
此事^カ、と、思^カ、ゆかぬ^カ。又、候^カ、之^カ、家^カ、
二日^カ、わの次^カ、と、又、い、衆^カ、附^カ、雜記^カ、よ、七月、七日、乃^カ、又、張^カ
酒^カ、済^カ、と、うき^カ、と、あらす、傳^カ、と、ゆき^カ、

七夕乃今の事葉日事よようかひ
乃門水のせまの横風ふすいとまれてゆきをひく
古今集ノ一丸山内羽恒
年生ひりと金代セタ乃ぬうよのひくと氣うみ
もとあら風

整色の如きをば此度の年も一トひやむり
總括集小摺大綱を宣示
所々也其の事と云ふ天のあつては年よ一夏が身
の拾き集不前國に方人食
り神を詔ぬらむや其の御よりひやく込とよきり也

新宿撰集より 送宿題五

すむかの宿をあく 七夕のたまを要代うだかされ

七夕乃の松波

雪濱月地一お色。未抵經年引恨多。最恨明朝
微車雨。不夜回脚渡天河。

又 星期五

雪屋と波斗柄移鶴鳴鳥慢移鶴。天使移衛
旗河濱。一冰還並有天晴。

又

織女牽牛雙扇用。年も一反西河東風言天上

移ねむと羽勝人間去不回

○今日牽綱とくふ事り。十弟記。とくひ。一
氏内歎。七月七日。又犯す。玉蟲思秋。となり。今。癡
痴と。やうじうれ。故日。悔ねよ。未解。ところ。しゆふ
も。危日よ。かづく。索解。とくこの。蟲と。ま。後
人。二日。索解。とく。ハ。痴痴。と。う。え。い
は。後だ。う。す。あ。と。く。す。日。史。瘞。外。國。之
異。溼。よ。感。し。因。彼。食。色。愁。よ。傷。く。れ。て。病。り。之。
因。過。み。を。憂。傷。於。異。秋。の。瘞。瘞。や。方。そ。そ。う。と。之。れ
「く。擾。生。せ。の。づ。う。う。い。い。が。う。ん。だ。と。之。港

日索餌と食したまくも元氣根元より一分ハ
スル數とまぬうの事かんや決して二度は
死一世の人かほあ言と仕どひ

○今夜二星とあるとも此累とは、お食めときり
吉氣とくも奉りて立色の多そつて御子を
志々男女の在能事の縁といひ故にこれと乞所
歎くつあつて衣服と驟一書史とくとく事
ひくは事半百本うてハ天平勝寛七年にくより
しまくる事根性よ見えくら絶えまの飯水無事
はゆゆすきよ併あり又
七夕まふ毛筆と道哥を奉乃素れ玉器と祝ふも

て極り事よかくより新機集の奇よ

事半よのあそきの正津すか射場お橋にくともほ
乞所莫く事根財色風生化すよ刀て皆わがれ
又うれぬぐくへ事なりとくまむと婦人女め
たまも事よばけす書寫衣服とくじて能
の圓すたヨリ事すや都満ち股中の書とさ
流咸ち猿鼻禪とくのくも多くもあらう

今氣集よ被因法師の奇

七夕の若の衣とくじて今まくもあらう

陳秀叟之子也

楊柳七夕代詩

李金華牛志義傾過紙昇金桂年
人向巧不遙人巧寄

○今日菴事丸と食せ一麺と坐てドレヒテ嘗てハ全より
たりハ内皮裏ククミナチと曝アシタマせに頭カミ及シテ重タメ及シテ七セブン纏マツコトにまつり
又角カク焉ハシと取ハシく也傳書タウシキ義イニシヤガサリよニ重タメに蠹カミキと碑ヒ
か塾カジ車カマツ、熟カタマリよ乃カタマリアリ

廿二日 二日より今日まで乃方ぬくゞら日暮一
博磨と拂ひ難い遙とちりて塵埃とたゞを以す
へ一九博磨とたゞより一年にテアリハラガ
ヨリタニ博磨とはとよとよと日夕ドクニ天音を
よしとよすがふ事多きれハ時時あくび月の日よりを
よく見すゞ候れとよすがふとよすがふとよす
○翁人ふ乃様也とぞ翁人ふりあはれやうとよ
くより酒わうかとおうり又餐とあるゆうなり
とつ乃世よりうちヤウリとん今乃世俗よどりエ
有りてせうとまつまよ今ゆきかんと

あかねがうれしのきを傳たゞ

○今來世間の人ちに詔の事ありおとく史と傳
の如きよあく歎うるやう思ふ事多きせむりよ乃等
士數十人乃至數百人をか多く參せざりや佛氏乃致
まとい寧々として後繼生れの御靈本源すと皆曰
かくよぢに事すと知り人多しと云わ至り
コト多きされば其輩紛るも中元乃芻蕘也と呼
て云ひ縫てるゝ冠服と云ふの外よ出で形と號く
楫櫓一ノ被と稱ひて入室年一又二月と遡てか齋
の御と號よひれど御事つゝとあきらめら

まきやかに車の往来

十五日 今日と中元と云圍候 蓬萊閣と繫りて本家
より食事へ 納職小どくゆ 楠木と申す事也 祀事
後代度、其舟乃公割木削竹巧也今人作御園室。力士前
此有鑿。大時難堪果食。酒同蓮花被冊畫像。之妻之子
甚矣。ハカラ又至母先祖北墓と拂寫。今日墓と
拂寫。此後今宵墓前よ能ひ號と懶す。月全慶義。中元家主
からまく。三びき。而あく。を素食。生の松葉。枝代蓋牌と
かいて供食。どうか。酒果。とほねて。手の毛うつ。みを
又。也。此方。と。や。暮。番。拂。は。七月。十。日。祖。先。と。供。置
奉。而。墳。墓。と。拂。す。と。けり。これ。海。屋。内。役。よ。志。が。今

かくはまこすなうもー事とくと久ーとくまで聖人乃
ほよやまともせせ禮義より西道よ志行をへひあんを改
えりく青先のとく書記の儀式をまつて之をめ
毎月太日賜恩詔書等の事務用そー又や生車とふ
とーて怪よもぐりんとあらへ生の死乃靈をよ飯食と
まゆ墓所よりく死一墓前よ燒龕とい焼すと
生の死を食とまゆ生の死乃靈をよ飯食と
まゆるにすくはれ凡今夜モ世俗モして、就
まゆくは墓所の御事、般舟の人ハうせんの御事
まゆくは死ありくもきくさうむつゝ氣味や方程
を今くわうきりきたり、三點まるうて矣。

凡家財は私物ぞれもどうぞす事一多一中
月七月十九日盂蘭盆の後三か佛經より
眼蓮母と般舟とひそめられた事也と仰もひま老
翁を蒙せばよどりも本教中元の事懸と生の死
うか外とゆく事の形よから紙袋と三升
身舟(これと竹の上に)とけ虫とねくやまくられ
ゆく方隅と刀とくちの穴暖とよされと益々蓋
よ小織能富さまこと益々多きとつ又米紙と便
て生の死と享一秋の葉草とおうとそくをひく

トノハ風俗とトヤ志れハカハ事トモトモ志く
源氏日蓮之事と済會すても傳へ孟嘗經
ナシシテ書と能うて五候とあらじくアヤ國
アシ孟蘭盆の作事とモリ事聖武帝アハ天平
五年又始マリヨ一後自本紀又カニテ六年中
レ事報を天平哥ニ著大報ミ

キニモセ也皮毛が皮毛と傳ヒエヌカニテ又月がニシ
○五難終スルノ七月申元ノ日孟蘭盆事トテ一圓満
母縊鬼送ナ漏トテ原ヒ功徳と役ミ往の縊鬼と
志く食ヒタクナヒトヒサヘヒトテ世俗たゞひ浮居

乃後ミナシトモシテウニ代祖考カ天皇ニ登テ
極樂世界ヨリ生ハ事トシキマツテ儼鬼又有
てこれとまつりササヒシテアガハ甚シムアリ

○能育太子ハ前まく高湯子ハ高のみえか人能
歌と能す或エヒト來テソラノハ能歌とモラ人
内アハリハアヒナ元不競能と能シテ後極門院秀全義アヒア
アヒモウニノミ家ノ初モ元不競能と能シテ上元
アヒモウナリシノミ家淳化的向アヒシテアモト
ア能歌スルアリ

○又ヒ日世侯ニ海ノ漁魂とセ取シテアシテアリ
トカ唐の重在達ノ中元日地坐祠不採食ミテアリ



十六日 国語の日男女三歳の誕生日と申すと又やどめりて
奴婢のいじめをこしらへぬことより父母兄弟は對面する日
○今夜も宿を假つ赤壁に遡し月と星にておづく
秋三月もとがめの月公費のまつり八月十五日九月
廿二夜を月と申すと元和の月也。七月の三晩
ナシ好車のり人ハ車輦う何と申すと申すと今夜代
風と雲霞と月華と申すと

晦日 法事

け月夜寒冷あり衣と輕く毛と風塵と傷れ事
有り不得れ万葉の子も表亂つとぞ風不

感じやひあ感冒傷寒を癆嗽喘急の病やうる情
てこれと離へ

け月夜柳と冥々柳漆と氣り氣り柳の葉
とお反よく柳葉を身よ冰剣年多合入月令度義
かくあるて水多くたゞハ桶又入至一昼夜と漏てくこく
ちやうけと取ることす外乞と一あああざとゆき
又おもむくたゞかすれ冰とひづりやと入と乞と五日
漏てく室より常日志から是ニ書きおひ者別よ
多す入至一尺柳漆も久ととけハヤミく藏
まれたり壺よ入とおもてせきと能ねり

又桶ハシ竹筒チクヂンにて水ミズひいて墨モクとト。又桶ハシ入
板バンとて圓カイくらべ志シを減スル。其板バンより下アシテその
上アベに墨モクとトして常ノリめどくかカ。とくへや出ハシルとれ
やまへ取ハシルかす財カネも日ヒ給スル。とわきうきうの取ハシル
あくみへ板バンとトす。あく又桶ハシよ入スルとくらとくの桶ハシ
通スル。蓋カバの重ヒハ動搖ハシラフして移シせす。

天氣ヒムカ好シ財カネ代タダ寫スル。符ハシ漆ハシとト奴ハシ僕ハシ。一ヒ志シ底シな
能ハシ一ヒ志シ。對ハシは先ハシ通スル。とトり表ハシ面ハシよリ紙ハシとトく
めハシりお家ハシへ水ミズ入スル。とトれ紙ハシのうヒとトひて堅ハシとトる。
水ミズ入スル至ハシ一ヒ又中ハシ用ハシ。かハシとトり。またハシみハシを

金紙ハシとトも。あはうりあはうひ。ひのうひのうスハヤマナ。うよ
ちぶ加えハシてのう。う。ちくづき。ば。ぐ。け。く。ち。く。一ヒ行ハシ
ち。と。く。ぬ。ま。す。こ。す。し。そ。う。の。う。と。水。よ。へ。ち。う。と。去
て。一ヒ西。よ。堅。め。燒。紙。の。ど。く。や。ぎ。り。か。く。く。と。紙。と。包
ら。と。細。ス。き。う。一ヒ。ま。か。と。ま。せ。く。す。り。合。毛。と。用。て。あ
ざ。と。絆。と。絆。と。しお。う。と。ま。の。う。と。紙。と。行。と。す。て。う。れ
く。ぬ。と。う。紙。と。し。う。ぎ。つ。が。あ。よ。あ。れ。う。ら。う。る。を。ぎ。う
と。引。て。つ。び。じ。ろ。あ。か。ま。う。の。と。う。か。く。ニ。す。解。か。ー。と。

そとて毎日をもよむちひろぐめれあきうぢ紙
のもぐりとおどりとひじくあきうぢつま紙とさわより
ひろきとをけと廻くとまよまよとひよすてせんと
ア付合ふとすのあきうぢよそくと付合する時又
詫ふうづきりはう何へんとせんとせんと
うつむきの差をとそきり付へりとくにせん
因がうり紙うりとまかと無な内とせんくと
引てだれどくは食はん左のとくと紙うりとや
里紙付合の角をとくとせんくと引て紙うりとや
とよまあく、紙うりのかと肉をせんて、紙うりとせん
せのうをとくとせんとせんとせんとせんとせん
そーとをももととみあま、紙とぬき地獄示選
てらのあきうぢ紙よまよと引地してよみ、人能
もうせ地獄ノよふうまよりとせんげ地獄
自と後日よかく一かくと後又うまよとせんと二三
引毎女子一かくと後又うまよとせんと二三
表ひく後裏よもがりかくしむとてとくとせ
沙よよりてよまよとせんとまよとせん
け露よとせん

立秋乃後菘乃蔓菁苔蘚葛乃蘿と藤ト雲

ナツツモヤシハ菘蔓茎とつまくまけハ収食ナリ
ナツヘ八月ノ後まづハ菘蔓を曳く者ニこれを
ちやく奪ひれた根タリ七月初まづハ菘蔓
菘蔓色菘蔓と因財メサズハ根タリ
宅がまに生まくナリアモノ者です根と八月
ノ初カニモアキリ大葱小葱ともうの大葱
トカラウ多少葱六根と云ふ
トナリテ日は乾す

八月菘と食多キガアルモトヨ喝炭ナリ人と譽す

食ハ目と擦す麻様をくハ氣とうごくレ葉更
とくハ絲葉とや姫の息葉と多く食ハ人と傳
葉と食ハ氣とうごく汝多密と多く食ハ暴葉
亂を重テ生薑と食ハシハ根肉多く食ハ絲乳
と擦す立秋ノ後菘解及水波解と食多れ
立秋代後十日瓦と多食ウラ次月令度氣爽
ナツ月吳蔓茎と多食冷水と多く香ハシハ根入
南財害ナクニモ後日よ御りて病と生す又ハ
月ノ内解多キモ年ノ間常生冷ハ物也
多食と多食ハ邊界ノ氣田又帰又癪病と

主よ忙と遙よとくゆ

七月八日候才一寒風五才二白露降才三寒露
太立秋の三候より才に立乃全ち方立毛毛
始肅才六未乃登才立毛毛

始肅才六未乃登才立毛毛

立秋至立平才刻十分夜半二刻半分立毛毛

立秋至立平才刻十分夜半二刻半分立毛毛

八月

八月(舊ノ八月の常秋故ハ八月乃中ノ八月の是後)仲秋
櫛敷御と申言とよ。八月の初々と金扇とつ立毛毛

立毛毛在夏と七月と
子と豊月と申言とよ。

朝日傍人、朝と云今日たのもとて人よめと遙穀さう

事何うるも根治よとくことすりを更よ本役才
西禮をあす世俗力國儀ナリ或假名紀と建毛政
年号(舊ノ八月)に既に車行り才先ハ因のとくとも
とお駕かまくわがよのく人りとて行り才
とくや又秀明も大國丸文承の紀よせ七年うり葉
旗よ天下に滿布せりのとく終て國主とて
行内事をえきく國主よ法服也潔すとて
て加賀通方ニ代多て四者行り才國主とて
き矣アキシムとを知り男女駆よよりけりよ法
事しむよ聖道とひづれせ經りクハ嘉瑞ナリモ

内と外とありきりまともに仕合ひうるを重
も序りたる事のまことにあつた年
紀を分明ちくはとへ後漢書、魏志の内記せれ
より久年をすや御くよ今年かひ書れやれ
お前とくとく年號をとくともひころ詠よせ
てよきてゆきぬとくとくは年をすくやと
おとゆきく大聖事かとくとくは年をくゆ
ましをとく又鶴毛明く空季袖拂よとくとくは年
かくとくとくは年をすくとくとくは年をく
下がりとくとくは年をすくとくとくは年

一比たゞくまづうるをとひ代よはせばまとひ眼
宣ふへすまづを代せま候たゞくまづ
ひわせよろこびまたうりとくまわりしるをとじ
らぐそさうめあき肉糸のつまみく所の
あつうかとこの事はうまく又か月よとこ
かうくがまやととちえんやとこと事を
せ事うまくほりうへか事うへとこと
と事ほれと今をとれをかうてと
まづれ事と

今事はそぞろに記されぬべしと見えり

のぬ詔れ役よよりてそし始まる事一月をす
ノより人仰てそれとて延長式はゆかゆ等をもとて見
えゆまゆく西史ともあゆうそれハソウモテ
絶りぬいと事根原ノ役トヤリヒシテ
近世よりこそ手續色のう事事體とシ書う
づくきハ物書うへり難能也とシテゆき事
毛毛毛りなくぬる多一今は書ヨ引風ハ考ヨ
御正月ニ又今ひそく不せよ秋の風氣のみ
とぞよゆふ風のまれつからヒツナリトモ
ナツモハ月朝腰とたす修ヨモと腰腰とモ
アヌセリ事ナリ

○今月夢寐潛確數事ありて刀々腰ハ田穀の新
刈りと行ふをれどすとハ日中かれノ朝の禮義トモ
アヌセリ事ナリ

十日明夜の法勝スラモトニシケバモヒノ月と
亥ノ一ノ後即後八月十四日夜也
銀燈^{シルバーライト}を^{シテ}法勝^{ハタク}奉^{スル}事^ハ初^ト欲^シ圖^シ付^シ意^ス
宣^{ハシ}之^{シテ}亥^{ハシ}明^{ハシ}夜^{ハシ}法^{ハシ}勝^{ハシ}未^{ハシ}可^{ハシ}知^{ハシ}

十五日中秋と云ふ秋九月八日立秋ナキ事モイ國俗

今日の惣事へわくりゆく放生會とすひじ事ひ人
宣治十四代元正天皇乃御す嘗て淳治年九月の大隅
日向安國孔連すとれゆみ四裏より流軍主使の
八坂主の神室幸勝勝波豆栗神軍と引率あく
被圍と極一車か手と縫とそしきうばら
八幡乃の花宣よは度の合戰多々かんと殺され
左ねまきとあしとすとれへ徳國よ
つてるまくい飯とそしきひりまく一抄案記に
見えアツシキもさうも八幡の御案主とひき
ひきまくはははははははははははははははははは

ひ事りうるく人を同僚うや将軍合編
日本かい月すみ日経主令星石城其業有津國す
鶴齋あ鄰ともりせり年のひる奇令は新中細え
せよかくてはめがたをもくぶらじがきとよみ
○今をと秋むるかみくほよ月は意ひかは月夕
とをこ立夕とをひそへ奇人登案乃膳とぞひのえそり
林は山野根よつと今夜月と移すりたゞま
店代母子り書けにて皆人丈人至る者りとソミ
吉樂府よ端殊起りめりく漁人の中秋れ月方程
もう、ばゆと能と何うはと溢れせりもあ事

ニヤヌカスコニヒシトシノ月解と數してシテ
物より月解と考へておとく又月解西瓜
等と考へて看厚金とどあす。月令度承ミテ
歐陽彥就月總序云。月之為號。天則聲氣。大寒之
則蓋也。大暑也。蔽月。嘉後入蔽。立後作害。既秋之
於則度夏。先冬。八月於林。季始孟秋。立於秋之月
之中。皆於天邊。列室是均取於背數。列候兔園。況
坎壘不滿。大穴。與。候。皆。御。細。地。無。昇。東。床。
入而精。肌骨。與。之。殊。涼。神氣。與。之。清。冷。

○。事。主。萬。物。月。秋。主。月。去。水。之。轉。秋。老。金。氣。
金。水。性。也。主。立。初。分。其。事。別。知。天。地。固。わ。國。各。一。事。
火。火。金。還。夏。月。因。秋。立。清。氣。動。亂。役。之。先。人。惟。不。事。情。
終。古。う。集。よ。天。厚。ハ。所。す。

月。上。ひ。下。月。下。二。月。の。ま。い。ひ。月。の。か。月。う。下。火。

新。物。種。集。ア。レ。少。達。法。師。

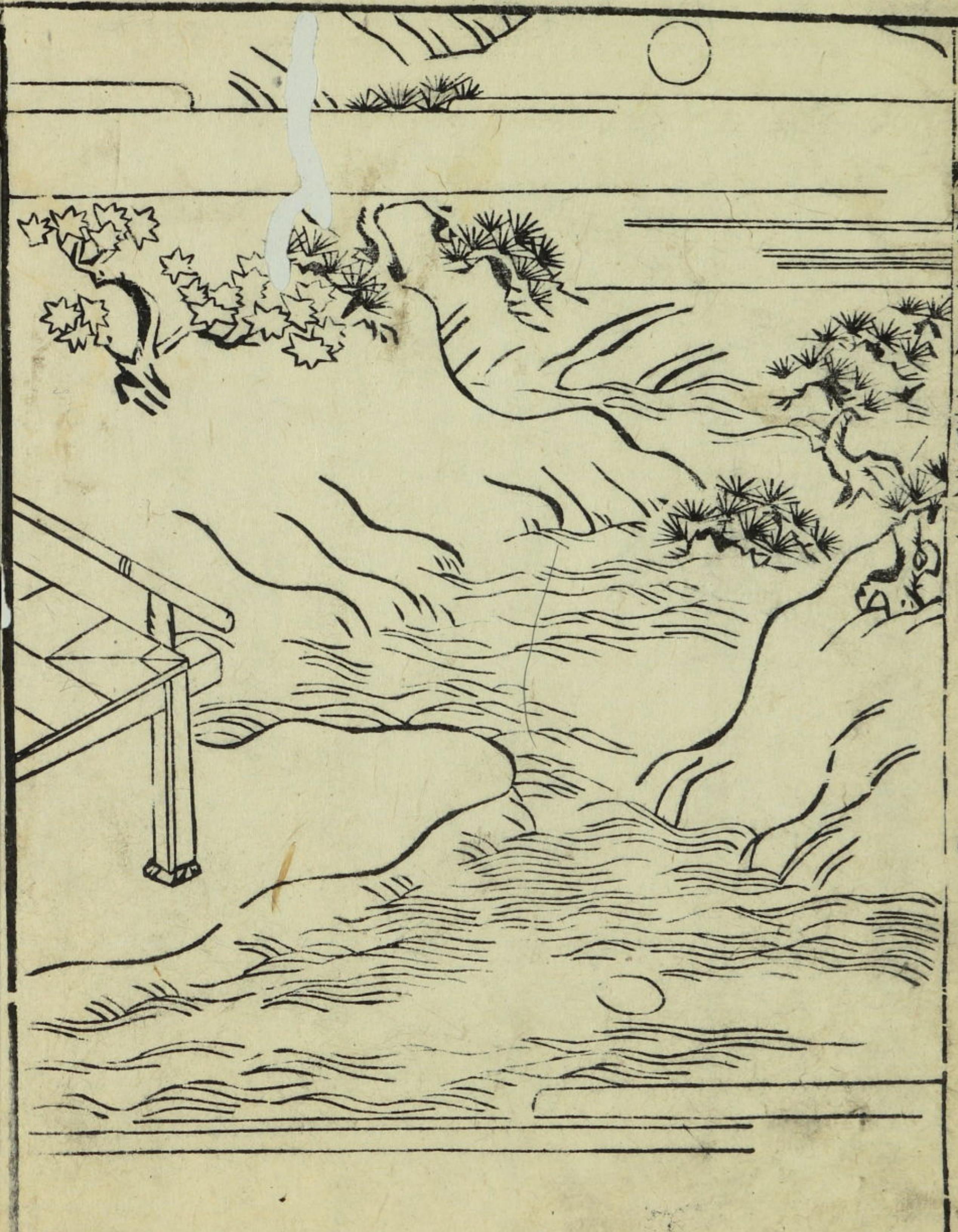
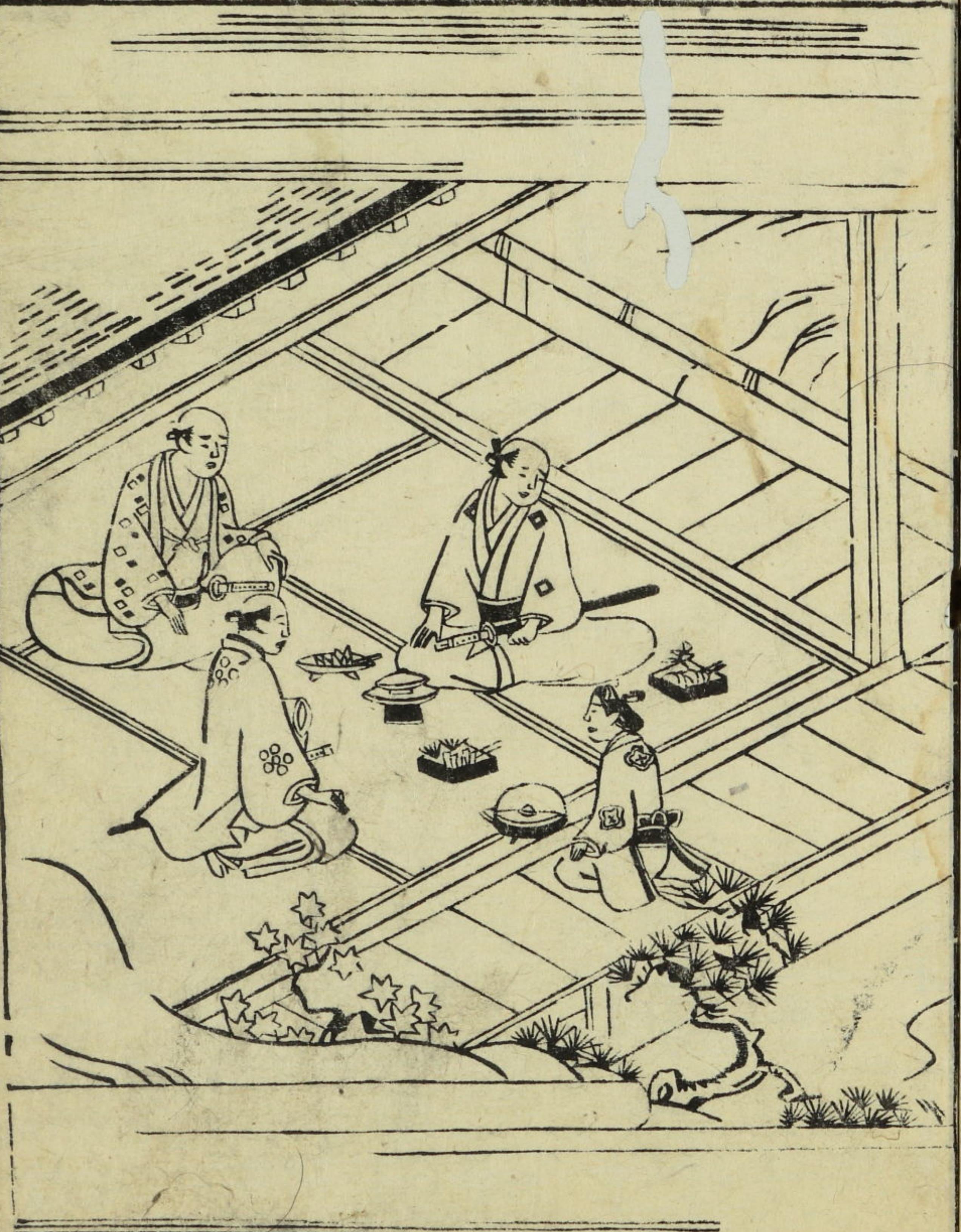
ク。ク。ホ。ト。株。ハ。サ。エ。モ。ハ。レ。ム。ク。シ。ヒ。ヨ。ヒ。月。う。下。火。

如。財。集。ア。レ。元。赤。

阿。多。ハ。又。特。本。セ。リ。ハ。ナ。ハ。レ。ム。ク。シ。ヒ。ヨ。ヒ。月。う。下。火。

金。多。集。ア。レ。源。經。房。

そ。や。多。ハ。シ。ホ。ヒ。月。經。ト。キ。ヒ。ト。チ。ク。ム。ハ。ソ。ア。



強景安う中株乃宿

百丈秋完掛玉燈瘦櫻香夜。四時此月
若人自今宵冷眼看

鄧子魏之宿

夜、池邊。八月生邪。此物易天明酒。惟
秋江水深入鋼壺報曉更

杜子美之宿

滿月光明後。仰折大刀幹。蓬萊地。攀桂仰天。

水底疑霜雪。林棲見羽毛。此時曉色兔。中秋數秋盡

邵康節之宿

一年一度中秋夜。十度中秋九度寒。未滿玉須彌。
右半。夢明仍候。到天心。更重。胆空。情非。陵不。睡
覩。時。忘。深。流。老。古人。緋。句。好。何。堪。平。里。世。如今。
○今夜觀星。與。前。日。對。望。之。又。以。之。觀。牡丹。之。根。一。藏。方。事。
今日。一。而。十。窮。多。宜。休。休。代。根。一。深。而。近。一。
寒。涵。と。以。之。浩。へ。い。を。妨。す。り。

二十七日。孔子。下。生。而。活。ひ。日。あ。り。これ。か。か。の。教。う。

晦。日。休。活。

もう。う。う。う。社。日。う。う。三。秋。の。後。中。又。の。成。代。日。土。ア。

神とまよひすけ先ニ二月の卯ノ母佐禮ムツルイとあはれ天アハレヒ
やうきムツルイで日月ヒツク乃まとすムツルイ紙ハラミとあがまハガマで
牧族ムツルイの祀ムツルイとまよひの多ハラミがまゆ祀ムツルイとあがまハガマ
乃ハラミへ乃ハラミとまよひの多ハラミの風ハラミと歎ハラミま
秋ハラミは秋ハラミれ多ハラミとて事ハラミめり也ハラミ邦ハラミもハ九月ハラミ
比ハラミ土地ハラミの神ハラミとまよひをとひく秋ハラミ社ハラミよたまハラミや慶ハラミや
志ハラミもよひたまハラミとて秋ハラミ社ハラミ多ハラミとそんや極ハラミて
そ小室ハラミの日ハラミめれも農ハラミ獻ハラミれまよハラミ地ハラミめりあつまハラミ
めも饗ハラミ饗ハラミ乃ハラミ密ハラミ多く來ハラミまほどひえの饗ハラミ饗ハラミよ財ハラミと
費ハラミ一ハラミあ産ハラミとや神ハラミきの朝ハラミ一ハラミをま比ハラミ海ハラミ湯ハラミ之國ハラミ

月を候る事無く此報す

は月を候り人を新穀と考へて稻を乃益木に與
うばら新穀と名す

此月涼風あり時人多く風よ感して病す様と風と應
尾中より上旬より松葉葵と前一毫中より囊後
ちやく桂と名すすば月うやうと一寸すと春より

萬葉葵を上旬の初前一萬葉ハヤシノツツノツツノツ
みやうと生むる二月に至る間第一月の頃に之に
はあり蟹栗ハあよもすと中秋の日程一月に
まつゝ生むてかづく元和五年と申したがゆどひの土

やうされは生一が一トツされば生せばやうすけりゆう
一けきといたがわいひとく次も云うととくとく
べづれを苗生しても生じとばすくとまき

豆豆代と牧草一植代多と生みとてくとてくと豆豆
たねより生む也既而と生て肉と肉と能むなど
てとく一め此とれへ出むすひ又凡て多ものとて

取收至一

熟一たる葉と脇にて後茎して肉と剥ぎてまき收
至一生すと蓋があり事變とハ用ひて次根去
一瓦束の御宅よりてすとあるとハ熟せると

さうくの性向

は月茅と擣^トておまえ集^{めぐら}ひとてん採根^{ねの}多く八月採^ト
秋枝^{あきのき}落^{ハシ}れ松^{マツ}津^つ洞^{どう}波^{なみ}山^{さん}下^{しも}か秋^{あき}採^ト立^{たて}貯^{たま}蓄^{たま}各^{くわ}
種^{たね}其^そ本^{もと}熟^{じゆ}也^{まよ}二月^{にがつ}乃^の都^と
記す

洪^{こう}月竹^{たけ}と^トれ^ハ撫^{なで}す^{月令度}夏^{なつ}月^よ有^あ竹^{たけ}地^じ羊^{よう}かく^ト
やく^トく^ト貯^{たま}て^ト元^{もと}落^{ハシ}れ^{マツ}羊^{よう}不^ふ輕^軽法^{ほう}う^カき^と皮^ひと失^ふ
ふく^トや^まそ^の煙^{えん}かく^羊と^あひ^かれ^ハ承^{うけ}く^不輕^軽ま^ハ
考^{かう}善^{ぜん}耕^うハ^ハ仄^{せき}計^{けい}かく^{洗^{あらわ}ひ}よ^ハ一^{いつ}日^{にち}
廻^{まわ}一^{だつ}を出^だす^まは^{から}幹^{かん}後^ご柄^ほ矢^や稟^{りん}木^{もく}刀^{とう}を^{かた}と
は月^は又^{また}施^せ耕^うと收^う穀^{こく}一^{ひと}布^ぬと^あひ^かる^ハ絹^{きぬ}と^あ用^{もち}入^る絹^{きぬ}布^ぬ

と染^{そめ}毒^{どく}を^あひ^かる^ハ不^ふ外^{がい}用^{もち}多^た

此^こ月天^{あま}寒^{さむ}冷^{れい}なり多^{多く}生^{なま}患^かり^ハ次^{つぎ}生^{なま}蒜^{さい}能^の捕^{つか}葉^は
生^{なま}寒^{さむ}鮑^{あわ}子^こ蟹^{かに}と食^くひ^むむ^かり^ハ又^{また}生^{なま}蒜^{さい}能^の捕^{つか}葉^は
秀^{ひで}年^{とし}書^か月令^{げき}合^あて^ハ之^を是^{これ}度^{たど}義^ぎよ^うと^う重^{じゆ}及^{およ}七^{しち}藏^{ざら}よ^うと^うく^し之^を乃^の活^は躍^よ乃^の
流^{なが}泉^{いずみ}と^と餘^よ事^{こと}か^うり^人を^とて^て釋^し脚^き歎^{たん}と^と詠^{うた}せ^ば也^は

八^は月の^か候^う才^さ一^{いつ}箇^か處^し才^さ二^に箇^か處^し才^さ三^み箇^か處^し才^さ四^よ箇^か處^し
處^し太^お白^{しら}朧^る乃^の三^{さん}候^う才^さ半^{はん}白^{しら}雷^{らい}始^{はじ}收^う春^{はる}才^さ五^ご箇^か處^し
處^し數^{かず}處^し才^さ六^{ろく}冰^{ひや}始^{はじ}涸^{ひき}古^{いき}秋^{あき}才^さ三^{さん}箇^か處^し才^さ四^よ箇^か處^し

刻^{とき}秋^{あき}立^{たて}十^と月^{つき}金^{きん}度^ど嚴^{ごん}

九月

秋氣ハ九月の邊秋陽ハ九月の中。九月の暮ニ桂月也。秋陽
萬物徧と生長也。○九月乃ち冬と秋月也。つゝ秋也。秋
秋氣也。又秋か九月とす。と春也。秋也。集也。秋より月をす。九
月也。又九月也。是也。九月と秋也。月と秋也。四五六月とす。二六月とす。

朝日 今日より八日まく給衣とま

八日 休活

九日 桂陽と云月と日と二からう老湯の難よやかと
不かしよえかんりと重九にての圓悟公は。筆者と
是又今日栗み飯と食ひ歌花のじもろて。ゆと
嘗てまきとお鍋と無不可をそぞり。又おもやけよと萬葉と嘗
何色と老湯の寢とよおせよ。の事根ほよ

ちゆうとねやあうなせへもく。けりぬりと
一ノ木今日子の小物と老湯眺らす。御歎うらへ九月前
鐵弓鑿玉とお物とて

絶命書記より多く海角の植家といまの費立房
不活くえーと老湯とあ用費立房極矣
かりよと今秋九月九日老湯立房極矣
絳囊とぬのく中に某黄とそり。臂うき山
ふよて老湯とのやうと世界老湯と極矣。それ
言と竹て九日よおりてゆくればとせんに
玉房へつがなくてあやせ老湯立房立房

至下也。房これとあまここれ。海う命よかわうや
アリ。世人へ九日よ御り無く。山よも。と爲るとの
歸人菜黃囊と。革ひきはがと。大人。は後。總好。而
難船よそく。九月菜黃と。佩ひす。の。が。ア。易。花。而。と。の。む。花。而。
費。去。房。極。京。と。安。と。避。り。御。と。教。と。と。そ。う。れ。來。が。と。ほ。され。を。
西。京。難。記。又。殿。史。人。の。御。免。賈。佩。蘭。あ。か。に。行。り。て。九。月。九。日。蓮。得
と。食。い。易。花。而。と。の。む。花。而。す。い。今。を。て。お。季。す。じ。せ。う。な。で。
下。り。は。て。を。と。と。く。次。と。後。ま。ハ。達。れ。又。月。令。度。參。す。仙。書。
ト。め。ミ。テ。よ。ま。す。而。極。京。と。始。す。だ。だ。り。又。月。令。度。參。す。仙。書。
と。引。て。と。る。ハ。菜。黃。と。辟。邪。翁。ト。一。易。花。而。と。延。壽。
客。と。い。あ。よ。九。日。ば。二。物。と。か。う。て。海。九。日。花。消。
と。山。と。ち。ん。易。花。而。と。と。ば。後。慢。穀。と。す。り。に。た。手。
用。を。す。り。用。と。す。よ。九。月。九。日。律。せ。難。ト。御。し。御。り。難。九。日。

召。麻。よ。俗。に。ば。日。と。尚。ん。と。菜。黃。房。と。お。そ。除。
捕。む。毛。魚。氣。と。辟。邪。翁。と。初。熟。と。あ。せ。ぐ。主。ま。キ。
と。ア。ア。是。が。ん。西。役。な。く。所。又。今。日。薦。つ。を。あ。い。方。ア。
豪。素。あ。か。く。も。モ。御。法。薦。毛。舒。う。財。祀。を。臺。零。を。
其。の。參。米。に。や。ド。つ。そ。不。と。讓。し。本。年。九。月。九。日。
御。く。而。あ。ー。と。れ。と。然。か。よ。れ。と。薦。花。房。と。之。に。
西。京。難。記。と。お。こ。そ。下。

○立。並。供。袋。や。と。日。と。薄。く。上。包。櫛。奉。七。日。御。湯。ハ。中。
新。々。を。實。さ。る。而。此。難。記。す。り。う。九。月。九。日。御。齊。よ。
幸。く。湯。教。よ。あ。づ。と。そ。ア。リ。と。れ。古。御。湯。と。櫛。我。と。

すりこせゆるにかくひは後即ちとて古
乃まことば下とまつて海へ移るは後
とあく次第に屋根の織女柱梁等とて
てひゆすその五修えり

續平戴集よ新院引当典也

以末代條改重て九種に分ふもかくれ萬葉うす

室座百事にひ赤

お月やまとと萬葉代名の桜と万葉等をばよ人

諸芸豊く空弱乃様

一刀一束花紀只白羞。萬葉絶縁繫不禁秋彼ノ為懲



鳥紗帽獨倚西風滿眼愁

道約月九日乃作

履齒殿印微波已空床帽簷斜向吸財

催芳多殊未可輕萬祀

松竹九日醉山中之得小

江酒秋初處初夜寒雲機上醉微人世知
耳口笑萬事頻捕滿江歸他機破可聽佳節
不用空心急萬暉古來今東已渺牛山何必

猶沾衣

○今日薦之紀代久數而未嘗與之同處

十日因信今日り是衣とも二月晦日と詔を終う從
いへより乞まう被ふて行

十三日僂候今宵月孤苦の事か秋也と一言因
薦の後又八月十五日九月十三日ハ婁寅うりは第
清明なる亦二月と詔を良辰とすせひと云ひ奉れ
こそぶ祝地れおもと志くは且牛宿と満く考より
又貞母大小あきハちづくがよ健とすにうす元秋
之月と考へらう健すう中壯をりうこ一月と書す
尔往^{さへ}行^けせり我國ユヌ九月十三夜と用^く月孤苦

吉慶之八月より流よ十九夜の月と雲一ぬれば易に
月望よち一とソヒ又正月を満月とくに義と風
てこれ日と月のち一とモテ正月を觀すとモ詠
一ノにモテヒニタラ歌とヘアシテ次第トモク
月詠書也一詩也これモアヌ莫藝松寧府やく化
已經テラモ蓋韻色向雲霞と詩句一何の詠也と一詩
ヨハ九月十三夜内作とす幸れどモ蓋也後集云ハ九
月十玉衣内紙と行三ハヌアモアヌ御スヨーノ
三毛也モ先傳也此又ノ音代月と云て豈ふ可二代
集云ハノホカノモ歴氏御傳文廟の書云九月内は
タニナリ大内小室トウツテ四月よ十三夜の月
の少もれ度ク小防 サムレハモトクのひもあくれ
ナリナリ也モ少りにくわりモ少きも少ヤバ夜内と云
ガ一ノモヤキ人乃いちく明乃十二月内一節少若心太極う宵
会もく月と
歌つて

金家集云太寧大武也亥ノ月十三夜の月と傳
くすもな記憶と足ゆる月と付く事人多有一
平載集云一殊人不承

麻衣月ちのくはくと記てテテ生き一衣よだ原玉多
風雅集外在事未支歌物

くの株月乃とくにあたるをもとよりて

益永忠通号法性寺殿九月十三夜既月待

用鶴山寂月松陰院屬宿於此巨樹中因之號爲鶴
渡雪翁。藤家舊經濱玉水哥十二夜觀勝於大教
百年先君業今相傳前折圓扇及清閒啜文價半金

賄日沐浩

は風郊遊て血脈と計之

と旬小少麦とトト下旬に大麦と蕎麥と秋うどん
交穀とトク取田附八氣とトコト月令度義とト
堆肥築ちる而もとくらゆきへ甚釐義をくふえか

十月正後十二月初まぐやく

瓦第と二月上九月以あよ風のれへ日て乾へ十月以後
株ものへ陰乾トテトトとおもよふ刀をへりまへ
え精さる葉へ日て乾トキまよとく葉へ陰干コス
さうり他葉種落葉、荆芥セイカツモモヒハシヘ烈日
小わせハ氣うとくナリカトウハシハシ財をくね枝
落とす

ひ月牡丹芍薬及竹結果木とトト一株とト月
令度義とトモトト農政全書よぐうん果木とト
ゆ。小も先九月乃中代後掛のまうりとありて緑と

以くよりとやけたりたる所とふハ腰と入浴と洗へ
一昨年正月にテ久月の爲めに久月の

郭に居

は貝栗と板麩と肉と日食度糞とくらべてお湯は栗と
茶多れ肉とくらべてお湯は栗と去日水と油と
炒て冷て新薑を入油一合栗一合膳に竹葉と一壺
玉た一二食入る多きハ行け竹葉とやくいまと
と竹葉ホーロハとくらむわざとねづてされ
いたるせつたれ薑とうつむきとまづり酒手よち
つづくもあられ又膳水と二枚漫じ取あつ日には
胡麻と拌せ墨に入墨としき又防泄の中の壁の

浴より生薑と二月貝小豆と後能葵と又日水が
薑よぬととくら玉ば虫くわびて味甚ありとせり
又大薑と生あく牌玉より薑乃葉生もどりす
やうのとあて薑よ入モ豆と玉つゝかとれ薑と
用毛車と薑代出でやぶふと一あけ薑の口
生せすとくへてゆりあり又生と差くへモ
因ようべと玉くもとくもと
は比米穀と來歸り一用多一

正月薑と食あられ痼疾とだらか病とくへ病と

僚友と遊ぶを換す夢と食ふて飲酒と食ふて食事と
多く食ふて次大肉とく人々の歩きと傷と生冷の物
と常とて病疾と湯之月令度義事

墨書年上正月

九月の時候才一鷹鳳來寶才二雀入大冰天
ニ氣育萬物太極を爲乃二候あり才四羽乃翁
才五萬本萬萬才六藝鬼感備才至清才之候也
毛無毛至四十刻五十分夜五十二刻十分毛露毛至四十
立別四十分夜立十四刻十分月全度義

日本ノ叢書記卷之五



合四十一冊

全部

十

冊

貞觀政要

此書ハ唐太宗皇帝並群臣ノ嘉言善行良法義政ヲ吳兢編類入其後元ノ儒臣
戈直諸儒ノ論説ヲ附載レ考証註釈ヲ加工其義ヲ演々事明ラカニ辯貨シク
讀ムニ曉シマスレ明ノ憲宗帝御製ノ序同吳澄題辭ヲ述ベ世ニナクンバ有
ベカラザルノ書ト云予初テ諫之盛ニナルカナ唐貞觀賢臣良弼直言諫奏レ
テ政道ヲ輔佐ス如此人物ノ隆ンナルヲ古今稀ナル如ナリト感激シテ朝夕
手ヲ放タズ此書ヲ熟読スルニ依テ漸ク唐ニ良臣多キ所以ヲ曉セリ唐朝ノ
人物隆ンナルハ太宗帝ノ一心ニアツテ更ニ唐ニ而已人物有ニアラザルベ
シ其故ハ太宗帝群臣ニ對シテ知遇ノ厚キ己レヲ屈シテ諫ヲ納レ賢ニ任ジ
キヲ放タズ此書ヲ熟読スルニ依テ漸ク唐ニ良臣多キ所以ヲ曉セリ唐朝ノ
人物隆ンナルハアラザルヘシ太宗帝ノ如クナラハイヅレノ御代カ賢佐ニ
否ヲ退ク諫奏スル人ハ己ガ行ヒ正シカラズシテハ諫メ難シ自ラ人皆賢良
トナル所以也是ヲ以テ賢臣多キハ帝ノ心行ヨリ生スル处ナリ此片ノく人
能ニ委子臣下ハ言フニ及バズ皇妃太子ニ至ルテ諫ヲ奉リ日可ヲ獻レ
人物ノ隆ンナルニハアラザルヘシ太宗帝ノ如クナラハイヅレノ御代カ賢佐ニ
乏キアランヤ和漢此書ヲ以テ政事要務ナシ玉ヲ宜ナリ尔モ政事ニ用ユル而已ニ
アラズ士庶人タリ此書ヲ讀フヲ專務セハ脩射齊家四書六經ヲ讀ヨリ述方ル
ベシ其故ハ經文高古簡雅ニシテ聖人言也城ナラズ此書ハ義理照融質摺卑述ニシテ
記スル所ノト詳ニ遠ニ行ニ必述ヨリス高キニ上ルニ必卑ヨリス此書ヲ鑑戒トナシ精ヲ
ハケテ行慎ミ人ノ善言ヲ聽フ好ハ朋友下僕子弟皆諫ル人タルベシ喻エ身外モコムニ
以テ已意日ニ省リニバ日新ニニテ日新ニ聖旨ニ叶フシ既ニ予ガ如キ下愚ノ賤民ト雖ドモ
政要ヲ熟読シ齊家ノ要此書ニ盡スコラ自得ス國治ハ身ヲ脩メナルヲ既ニ大學ノ
明文昭々タリ正心而后脩身脩身而后齊家齊家而后治國治國而后天下正ナリ
上ツカタヨリ下庶人ニ至ルテ詒學シテ身ヲ脩メ家ヲ育フル木トナスベキ
此書ニ如クナレ

